

独房

小林多喜二

青空文庫

誰でもそうだが、田口もあすこから出てくると、まるで人が変わったのかと思う程、饒じょう舌ぜつになつていた。八カ月もの間、壁と壁と壁との間に——つまり小ツちやい独房ひとことの間に、たつた一人ツ切りでいたのだから、自分で自分の声をきけるのは、独り言でもした時の外はないわけだ。何かものをしやべると云つたところで、それも矢張り独り言でもした時のこと位だろう。その長い間、たゞ堰せき止められる一方でいた言葉が、自由になつた今、後から後からと押しよせてくるのだ。

保釈になつた最初の晩、疲れるといけないと云うので、早く寝ることにしたのだが、田口はどうとう一睡もしないで、朝まで色んなことをしやべり通してしまつた。自分では興奮も何もしていないと云つていたし、身体の工合も顔色も別にそんなに變つていなかったが、約一年目に出てきたシャバは、矢張り知らずに彼を興奮させていたのだろう。

これは、田口の話である。別に小説と云うべきものでもない。

ズロースを忘れない娘さん

S署から「たらい廻まわし」になって、Y署に行った時だった。

俺の入った留置場は一号監房だったが、皆はその留置場を「特等室」と云って喜んでいった。

「お前さん、いゝ処ところに入れてもらつたよ。」と云われた。

そこは隣りの家がぴつたりくつついでいるので、留置場の中へは朝から晩まで、ラジオがそのまんま聞えてきた。——野球の放送も、演芸も、浪花節も、オーケストラも。俺はすっかり喜んでしまった。これなら特等室だ、蒸むしツ返えしの二十九日も退屈なく過ごせると思った。然し皆はそのために「特等室」と云っているのではなかった。始め、俺にはワケが分らなかつた。

ところが、二日目かに、モサ（スリのこと）で入っていた目付のこわい男が、ニヤ／＼してながら自分の坐っている側へ寄つて来てみれと云つた。俺は好奇心にかられて、そこへズツて行くと、

「あすこを見る。」

と云つて、窓から上を見上げた。

俺はそれで「特等室」の本当の意味が分つた。

高い金棒の窓の丁度真ツ上が隣りの家の「物ほし」になっていて、十六七の娘さんが丁度洗濯物をもって、その急な梯子はしごを上つて行くところだった。——それが真ツ下から、そのまゝ見上げられた。

その後、誰か一人が合図をすると、皆は看守に気取られないように、——顔は看守の方へ向けたまゝ、身体だけをズツて寄つて行くことになった。

「ちえツ！ 又、ズロースをはいてやがる！」

なれてくると、俺もそんな冗談を云うようになった。

「共産党がそんなことを云うと、品なしだぜ。」

とエンコ（公園）に出ている不良がひやかした。

よく小説にあるように、俺たちは何時でもむずかしい、深刻な面をして、此処ここに坐つてばかりいるわけではないのだ。この決してズロースを忘れない娘さんに対する毎日々々の「期待」が、蒸しツ返えしの長い長い二十九日を、案外のん気に過ごさしてくれたようである。勿論もちろんその間に、俺は二三度調べに出て、竹刀しなで殴なぐられたり、靴のまゝで蹴けられたり、締めこみをされたりして、三日も横になつたきりでいたこともある。別の監房にいる俺たちの仲間も、帰りには片足を引きずつて来たり、出て行く時に何んでもなかつた

着物が、背中からズタ／＼に切られて戻ってきたりした。

「やられた」

と云つて、血の気のなくなつた顔を俺たちに向けたりした。

俺たちはその度に歯ぎしりをした。然し、そうでない時、俺たちは誰よりも一番燥はしやいで、元気で、ふざけたりするのだ。

十日、七日、五日……。だん／＼日が減つて行つた。そうだ、丁度あと三日という日の午後、夕立がやつてきた。

「干物！ 干物！」

となりの家の中では、バタ／＼と周章あわてゝるらしい。

しめた！ 俺はニヤリとした。それは全く天裕てんゆうだった。——今日は忘れるぞ。

雨戸がせわしく開いて、娘さんが梯子を駈け上がつて行く。俺は知らずに息をのんでいた。

畜生！ 何んてことだ、又忘れてやがらない！ 俺たちはがっかりしてしまった。

「六号！」

その時、看守が大声で怒鳴どなつた。

見付けられたな、と思った。俺はギョツとした。見付けられたとすれば、俺だけではない、これから入ってくる何百という人たちの、こッそり蔵しまいこんでいた楽しみが奪われてしまうんだ。窓でも閉められてみる、此処はそのまゝ穴蔵になってしまう。

「調べだ。——でろ。」

俺は助かったと思った。そして元気よく立ち上がった。

三階に上がって行くと、応接間らしいところに、検事が書記を連れてやってきていた。俺はそこで二時間ほど調べられた。警察の調べのおさらいのようなもので、別に大したことはなかった。調べが終った時、

「真夏の留置場は苦しいだろう。」

ないことに、検事がそんな調子でお世辞を云った。

「ウ、ウン、元気さ。」

俺はニベもなく云いかえした。——が、フト、ズロースの事に気付いて俺は思わずクスリと笑った。然し、その時の俺の考えの底には、お前たちがいくら俺たちを留置場へ入れて苦しめようたって、どっこい、そんなに苦しんでなんかいないんだ、という考えがあったのだ。

「ま、もう少しの我慢ですよ。」

検事が鞆をかゝえこんで、立ち上るとき云った。俺は聞いていなかった。

豆の話

俺はどうく／＼起訴されてしまった。Y署の二十九日が終ると、裁判所へ呼び出されて、予審判事から検事の起訴理由を読みきかせられた。それから簡単な調書をとられた。

「じゃ、T刑務所へ廻っていてももらいます。いずれ又そこでお目にかゝりましょう。」

好男子で、スンなりとのびた白い手に指環ゆびわのよく似合う予審判事がそう云って、ベルを押しした。ドアの入口で待っていた特高が、直ぐすしやちこばった恰好で入ってきた。判事の云う一言々に句読点でも打ってゆくように、ハ、ハア、ハッ、と云って、その度に頭をさげた。

私はその特高に連れられたまゝ、何ベンも何ベンもグル／＼階段を降りて、バラツクの控室に戻ってきた。途中、忙しそうに歩いている色んな人たちと出会った。その人たちは俺を見ると、一寸立ち止まって、それから頭を振っていた。

「さ、これでこの世の見おさめだぜ、君。」
と特高が云った。

「二年も前に入っている三・一五の連中さえまだ公判になっていないんだから、順押しに行く」と随分長くなるぜ。」

俺はその時、フト硝子戸^{ガラス}越しに、汚い空地の隅ツこにほこりをかぶっている、広い葉を持つた名の知れない草を見ていた。四方の建物が高いので、サン／＼とふり注いでいる真昼の光が、それにはとゞいていない。それは別に奇妙な草でも何んでもなかったが——自分でも分らずに、それだけを見ていたことが、今でも妙に印象に残っている。理窟がなく、こんなことがよくあるものかも知れない。

俺は今朝Nが警察の出がけに持ってきてくれたトマトとマンジュウの包みをあげたが、しばらくうつつろな気持で、膝の上に置いたきりにしていた。

控室には俺の外にコソ泥^{どろ}ていの髯^{ひげ}をボウ／＼とのばした厚い唇の男が、巡査に付き添われて検事の調べを待っていた。俺は腹が減っているようで、食ってみると然しマンジュウは三つといかなかった。それで残りをその男にやった。「髯」は見ている間に、ムシヤムシヤと食ってしまった。そして今度はトマトを食っている俺の口元をだまってみつけてい

た。俺はその男に不思議な圧迫を感じた。どたん場へくると、俺はこの男よりも出来ていないのかと、その時思った。

自動車は昼頃やつてきた。俺は窓という窓に鉄棒を張った「護送自動車」を想像していた。ところが、クリーム色に塗ったナツシユという自動車のオープンで、それはふさわしくなくハイカラなものだった。俺は両側を二人の特高に挟はさまれて、クッションに腰を下した。これは、だが、これまでゞ何百人の同志を運んだ車だろう。俺は自分の身のまわりを見、天井を見、スプリングを揺すつてみた。

六十日目に始めてみる街、そしてこれから少なくとも二年間は見ることはない街、——俺は自動車の両側から、どんなものでも一つ残らず見ておかなければならないと思った。

麴町何丁目——四谷見付——塩町——そして新宿……。その日は土曜日で、新宿は人が出ている。俺はその雑踏の無数の顔のなかゝら、誰か仲間のものが一人でも歩いていないかと、探がした。だが、自動車はゴー、ゴーと響きかえるガードの下をくゞつて、もはや淀橋へ出て行っていた。

前から来るのを、のんびりと待ち合せてゴトンくと動く、あの毎日のように乗ったことのある西武電車を、自動車はセツかちにドンくと追い越した。風が頬の両側へ、音をた

て、吹きわけて行つた、その辺は皆見慣れた街並だつた。

N 駅に出る狭い道を曲がつた時、自動車の前を毎朝めしを食いに行つていた食堂のおかみさんが、片手に葱ねぎの束を持って、子供をあやしなから横切つて行くのを見付けた。

前に、俺はその食堂で「金属」の仕事をしていた女の人と十五銭のめしを食つていたことがあつた。その時、多分いま前を横切つてゆく子供に、奥の方でコツクがものを云つているのが聞えた。

「オヤ、この子供は今んちから豆ツて云うと、夢中になるぜ。いやだなア！」

そんなことを云つた。

すると、一緒にめしを食つていた女の人が、プツと笑い出して、それから周章て、真赤になつてしまつた。

俺はそれをひよいと思ひ出したのだ。すると、急にその女の同志に対する愛着の感じが胸をうつてきた。その女の人は今どうしているだろう？　つかまらないで、まだ仕事をしているだろうか。

自動車は警笛をならした。そこは道が狭まかつたのだ。おかみさんはチョツとこつちを振りかえつたが、勿論あれ程見知つている俺が、こんな自動車に乗つていようなぞという

事には気付く筈はずもなく——過ぎてしまった。俺は首を窮屈にまげて、しばらくの間うしろの窓から振りかえっていた。

「もう直ぐだ、あそこの角をまがると、刑務所の壁が見えるよ。」

——俺はその言葉に、だまって向き直った。

青い禪

自動車は合図の警笛をならしながら、刑務所の構内に入って行った。

監獄のコンクリートの壁は、側へ行くと、思ったよりも見上げる程に高く、その下を歩いている人は小さかった。——自動車から降りて、その壁を何度も見上げながら、俺はきつく帯をしめ直した。

皮に入ったピストルを肩からかけ、剣を吊した門衛に小さいカードと引きくらべに、ジロ／＼顔をしらべられてから、俺だちは鉄の門に入った。——入ると、後で重い鉄の扉がギーと音をたて、閉じた。

俺はその音をきいた。それは聞いてしまっただけから、身体の中に音そのまゝの形で残る

ような音だった。この戸はこれから二年の間、俺のために今のまゝ閉じられているんだ、
 と思った。

薄暗い面会所の前を通ると、その溜りたまから沢山の顔がこつちを向いた。俺は吸い残りの
 バットをふかしながら、捕かまるとき持っていた全財産の風呂敷包たった一つをぶら下
 げて入って行つた。煙草も、このたつた一本きりで、これから何年もの間モウのめないの
 だ！

晴れ上がった良い天気だった。

トロツコのレールが縦横に敷かさつている薄暗い一見地下室らしく見えるところを通つ
 て、階段を上ると、広い事務所に出た。そこで私の両側についてきた特高が引き継ぎをや
 った。

「君は秋田の生れだと云つたな。僕もそうだよ。これも何んかのめぐり合せだろう。僕か
 ら云うのも変だが、何よりまア身体を丈夫にしてい給え。」

ずんぐりした方が一寸テレて、帽子の縁に手をやった。

ごじゃくと書類の積まされた沢山の机を越して、窓際近くで、顎あごのしゃくれた眼のひ
 ツこんだ美しい女の事務員が、タイプライターを打ちながら、時々こつちを見ていた。こ

ういう所にそんな女を見るのが、俺には何んだか不思議な気がした。

持ちものをすっかり調らべられてから、係が厚い帳面を持ってきて、刑務所で預かる所持金の受取りをさせられた。捕かまる時、オレは交通費として現金を十円ほど持っていた。俺たちのように運動をしているものは、命と同じように「交通費」を大切にしている。――印を押そうと思って、広げられた帳面を見ると、俺の名から二つ三つ前に、知っている名前のあるのに目がとまった。それは名の知れている左翼の人で、最近どうして書かなくなつたのだらうと思つていた人だった。ところが、此処にいたのだ。この人も！ そう思うと、俺は何んだか急に気が強くなるのを感じた。

それから「仮調所」に連れて行かれて、裸かにされた。チンポも何もすっかり出して、横を向いたり、廻われ右をしたり、身体中の特徴を記録にとられた。俺は自分でも知らなかつた背中のホク口を探し出された。其^{そこ}処で、俺は「青い着物」をさせられたのだつた。青い着物を着、青い股^{ももひき}引をはき、青い禪^{ふんとし}をしめ、青い帯をしめ、ワラ草履^{ぞうり}をはき、――生れて始めて、俺は「編笠^{あみがさ}」をかぶつた。だが、俺は禪まで青くなくなつていゝだらうと思つた。

向うのコンクリートの建物の間を、赤い着物をきた囚人が一列に並んで仕事から帰つて

くるのが見える。

俺は始め身体がどうしても小刻みにふるえて、困った。

「どうだ、初めての着工合は……」
と看守が云った。

俺は、知らないうちに入っていた肩から力を抜いて、ゆっくり、大きく息を吸いこんだ。
「この廊下を真ツ直ぐに行くんだ、——編笠をかぶって。」

俺は看守の指さす方を見た。

長い廊下の行手に、沢山の鉄格子の窓を持った赤い煉瓦れんがの建物がつつ立っていた。
俺はだまって、その方へ歩き出した。

アパアト住い

「南房」の階上。

独房——「No. 19.」

共犯番号「セ」の六十三号。

警察から来ると、此処は何んと静かなところだろう。長い廊下の両側には、錠じょうの下りた幾十という独房がズラリと並んでいた。俺はその前を通ったとき、フトその一つの独房の中から低いしわぶきの声を耳にした。俺はその時、突然肩をつかまれたように、そのどの中にも我々の同志が腕を組み、眼を光らして坐っているのだ、ということを感じた。

俺は最初まだ何にも揃そろっていないガランドウの独房の中に入れられた。扉が小さい室に風を煽あおつて閉まると、ガチャン／＼と鋭い音を立て、錠じょうが下り、——俺は生れて始めて、たった独りにされたのだ。

俺は音をたてないように、室の中を歩きまわり、壁をたゞいてみ、窓から外をソツと覗のぞいてみ、それから廊下の方に聞き耳をたてた。

誰か廊下を歩いてゆく。立ち止まって、その音に何時でも耳をすましていると、急にワクワクと身体が底から顫ふるえてくる——恐怖に似た物狂おしさが襲ってきた。その時、今でも覚えている、俺はワツと声をあげて泣けるものなら、子供よりもモツと大声を上げて、恥知らずに泣いてしまいたかった。

しばらくして、赤い着物をきた雑役が、色々な「世帯道具」——その雑役はそんなこと

を云つた——を運んできてくれた。

「どうした？　眼が赤いようだな。」

と、俺を見て云つた——

「なに、じき慣れるさ。」

俺は相手から顔をそむけて、

「バカ！　共産党が泣くかい。」

と云つた。

箒^{ほうき}。ハタキ。渋紙で作つた塵取^{ちりとり}。タン壺。雑巾。

蓋付き^{ふた}の茶碗二個。皿一枚。ワツパー箇。箸^{はし}一ぜん。——それだけ入っている食器箱。

フキン一枚。土瓶^{どびん}。湯呑茶碗一個。

黒い漆塗^{うるしぬり}の便器。洗面器。清水桶。排水桶。ヒシヤク一個。

縁のない畳一枚。玩具^{おもちゃ}のような足の低い蚊帳^{かや}。

それに番号の片^{きれ}と針と糸を渡されたので、俺は着物の襟^{えり}にそれを縫いつけた。そして、

こつそり小さい円^まるい鏡に写してみた。すると急に自分の顔が罪人になって見えてきた。

俺は急いで鏡を机の上に伏せてしまった。

雑役が用事の最後に、ニヤ／＼笑いながら云った。

「お前さん今度が初めてだね。これで一通りの道具はちやアんと揃ってるもんだろう。これからこの室が長い間のお前さんのアパートになるわけさ。だから、自分でキチン／＼と綺麗きれいにしておいた方がいゝよ。そしたら却々なかなか愛着が出るもんだ。」

それから、看守の方をチラツと見て、

「ヘン、しゃれたもんだ、この不景気にアパート住いだなんて！」
と云つて、出て行つた。

長い欧州航路

監獄に廻わつてから、何が一番気持ちよかつたかときかれましたら、俺は六十日目に始めてシャボンを使つてお湯に入つたことだと云おう。

湯槽ゆづねは小じんまりとしたコンクリートで出来ていて、お湯につかつていながら、スウィッチをひねると、ガチャン、ガタン、ガチャン、ガタン、ゴボン、ゴボンとスチームが入ってくるようになっていた。

入浴時間 十五分

規定の時間を守らざるものは入浴の順番取りかえることあるべし

警察の留置場にいたときよく、言問橋の袂たもとに住んでいる「青空一家」や三河島のバタヤ（屑買くずかひい）が引張られてきた。そんな連中は入つてくると、臭くさいいジト／＼したシャツを脱いで、虱しらみを取り出した。真つ黒なコロツとした虱が、折目という折目にウジョ／＼たかつていた。

一度、六十位の身体一杯にヒゼンをかいたバタヤのお爺さんが這はい入つてきたことがあつた。エンコに出ている、飲食店の裏口を廻つて歩いて、ズケ（残飯）にありついている可哀なお爺さんだった。五年刑務所にいて、やつとこの正月出てきたんだから、今年の正月だけはシャバでやつて行きたいと云つていた。——俺はそのお爺さんと寝てやっているうちに、すっかりヒゼンをうつされていた。それで、この六十日目に入るお湯が、俺をまるで夢中にさせてしまった。

そこは独房とちがつて、窓が低いので、刑務所の広い庭が見えた。低く円るく刈り込まれた松の木が、青々とした綺麗な芝生の上に何本も植えられていて、その間の小径の、あちこちに赤い着物が蹲んで、延び過ぎた草を呑のん氣きそうに摘んでいた。黒いゲートルを巻い

た、ゴム足袋の看守が両手を後にまわして、その側をブラ／＼しながら何か話しかけていた……。夕陽が向う側の監獄の壁を赤く染めて、手前の庭の半分に、煉瓦建の影を斜めに落していた。——それは日が暮れようとして、しかもまだ夜が来ていない一時の、すべてのものがその動きと音をやめている時だった。私はそのなごやかな監獄風景を眺めながら、たゞお湯の音だけをジャブ／＼とたて、身体をこすっていた。ものみんなが静かな世界に、お湯のジャブ／＼だけが音をたて、いるのが、何かしら今だに印象に残っている。

次の日は「理髪」だった。——俺はこうして、此処へ来てから一つ一つ人並みになって行った。——この床屋さんは赤い着物を着ている。

顔のちつとも写らない壊れた小さい鏡の置いてある窓際に坐ると、それでも首にハンカチをまいて、白いエプロンをかけてくれる。この「赤い」床屋さんは瘤の多いグル／＼頭の、太い眉をした元船員の男だった。三年食っていると云った。出たくないかときくと、なアに長い欧州航路を上陸をせずに、そのまゝ二三度繰りかえしていると思えば何んでもない、と云って笑った。

「アパート住い」と云い、又この「欧州航路」と云い、こゝに在るどの赤い着物も、そんなことを自分の家にいるよりも何んでもなく云ってのける。

用意が出来る、この床屋さんが後に廻りながら、

「バリカンで、ジヨキくやってしまうぜ。」

と云った。

それは分つていて……しかし云われてみると、矢張りギョツとした。

「頼む！ 少しは長くしておいてくれよ。」

「こゝん中において、一体誰に見せるんだ。」

と云つて、クツ、クツと笑つた。

「そうか、そうか、分つた。面会に来る女ひとがあるんだらうからな——」

それで俺の髪だけは助つた。然しこの理髪師はニキビであらうが、何んであらうが、上から下へ一気に剃かみそり刀を使って、それをそり落してしまつた。

俺がヒリ／＼する頬を抑えていると、ニヤ／＼笑いながら、

「こゝは銀座の床屋じゃないんだからな。」

と云つた。

赤色体操

俺だちは朝六時半に起きる。これは四季によって少しずつ違う。起きて直ぐ、蒲団を片付け、毛布をたゝみ、歯を磨いて、顔を洗う。その頃に丁度「点検」が廻わってくる。一隊は三人で、先頭の看守がガチャン／＼と扉を開けてゆくと、次の部長が独房の中を覗きこんで、点検簿と引き合せて、

「六十三番」

と呼ぶ。

殿りの看守がそれをガチャン／＼閉めて行く。

七時半になると「ごはんの用——意！」と、向う端の方で雑役が叫ぶ。そしたら、食器箱の蓋の上にワツパと茶碗を二つ載せ、片手に土瓶を持って、入口に立って待っている。飯の車が廊下を廻わってくるのだ。扉が開いたら、それを差出す。——円るい型にハメ込んだ番号の打つてある飯をワツパに、味噌汁を二杯に限って茶碗に、それから土瓶にお湯を貰う。味噌汁の表面には、時々煮込こまれて死んだウジに似た白い虫が浮いていた。

八時に「排水」と「給水」がある。新しい水を貰って、使った水を捨てゝもらい、便器を廊下に出して掃除をしてもらう。（これが一日に二度で、昼過ぎにもある。）

それが済むと、後は自由な時間になる。小さい固い机の上で本を読む。壁に「ラジオ体操」の図解が貼りつけてあるので、体操も出来る。

独房の入口の左上に、簡単な仕掛けがあつて、そこに出ている木の先を押すと、カタンと音がして、外の廊下に独房の番号を書いた扇形の「標示器」が突き出るようになっていく。看守がそれを見て、扉の小さいのぞきから「何んだ？」と、用事をきくに来てくれる。昼過ぎになると、担当の看守が「明日の願ひ事」と云つて、廻わってくる。

キャラメル一つ。林檎 十銭。

差入本の「下附願」。

書信 封緘ふうかん葉書二枚。

着物の宅下げ願。

運動は一日一度——二十分。入浴は一週二度、理髪は一週一度、診察が一日置きにある。一日置きに診察して貰えるので、時にはまるで「お抱え医者」を侍はべらしているゼイタクな気持を俺だちに起させることがある。然し勿論その「お抱え医者」なるものが、どんな医者であるかということになれば、それは全く別なことである。

夜、八時就寝、たつぷり十一時間の睡眠がとれる。

俺だちは「外」にいた時には、ヒドイ生活をしていた。一カ月以上も元気でお湯に入らなかつたし、何日も一日一度の飯で歩き廻つて、ゲツそり瘦せてしまつたこともある。一週間と同じ処に住んでいられないために、転々と住所をかえた。これ等のことが分らずにいて、長いうちにはウンとこたえていた。——それで、警察に六十日居り、それから刑務所と廻つてくるうちに、俺は自分の四肢がスンなりと肥えてゆくのを感じた。俺の場合、それは運動不足からくるむくみでも何んでもなく、はじめて身体が当り前にかえつて行くこの上もない健康からだつた。

俺だちの仲間は、今でも刑務所へ行くことを「別荘行」と云っている。ドンな場合でも決して屈することのないプロレタリアの剛毅さごうぎからくる朗ほがらうかさが、その言葉のうちに含まさっているわけだ。然し、そればかりでなしに、俺だちにとっては本来の意味——いわばブルジョワ的な「休息」という意味でも、此処は別荘であるということ、俺は発見した。俺だちは、だから此処で、出て行く迄に新しい精気と強い身体を作つておかなければならないのだ。

だが、さすがにこの赤色別荘は、一銭の費用もかゝらないし、喜樂的などころか、毎日

々々が鉄の如き規律のもとに過ぎてゆくのだ——然し、それは如何にも俺だちにふさわしいので、面白いと思っている。

「さ、これから赤色体操を始めるんだぞ。」

独房の中で「ラジオ体操」をやる時には、俺は何時でもそう云っている。こゝが赤色別荘なら、こゝでやるラジオ体操も従つて赤色体操なわけである。

俺は元気よく、力一杯に手を振り、足をあげる。

松葉の「K」「P」

運動場は扇形に開いた九つのコンクリートの壁がつつ立っていて、八つの空間を作っている。その中に一人ずつ入って、走り廻る。——それを丁度扇の要かなめに当る所に一段と高い台があつて、其処に看守が陣取り、皆を一眼に見下している。

俺だちの関係で入つたものは、運動の時まで独りにされる。ゴツホの有名な、皆が輪になつて歩き廻わっている「囚人運動」は、泥棒か人殺連中の囚人運動で、俺だちの囚人運動は矢張りゴツホには描けなかつたのだろう。

俺はその中で尻をはしよつて、もろはだ両肌ぬぎになり、おいち二、おいち二、と馳け足をはじめ。二十分だ。俺は運動に出ると、何時でも、その速力の出し工合と、身体の疲労の仕方によつて、自分の健康に見当をつける素朴な方法を注意深く実行している。

走りながら、こつちでワザと大きな声をあげると、隣りを走っている同志も大きな声を出した。エヘンとせき払いをすると、向う端で誰かゞ、エヘンと答える。それから時にはひじ肱で、壁をたゞいて、合図をした。

そのコンクリートの壁には、看守の目を盗んで書いたらしく、泥や——時には、何処から手に入れるものか白墨で「共」という字や、中途半端な「※」「※や、K・P（共産党の略字）」という字が幾つも書かれている。看守が見付け次第それを消して廻わるのだが、次の日になると、又ちアんと書かれています。雨の降った次の日運動に出たとき、俺は泥をソツと手づかみにして、何ベンも機会を覗つたが、ウマク行かなかつた。俺はどうもそういう事では、ボンくらかも知れない。

或る朝、運動場の端の方にある焼木の柵の割れ目に、松葉の一本々々を丹念に組合せて作られた「K」と「P」を発見した。俺はその時の喜びを忘れることが出来ない。俺は急に踊るときのような恰好をして——走り出した。看守が高いところから、俺の方を見た。

看守の眼を盗みながら、どの位の用意と時間をかけて、それを作ったのだろう。その一つ一つの動作をしている同志の気持が、そのまゝ俺に来るのだ。

同志は何処にでもいるんだ、何よりそう思った。一度、本を読むのに飽きたので、独房の壁の中を撫でまわして、落書を探がしたことがある。独房は警察の留置場とちがって、自分だけしか入っていないし、時々点検があるので、落書は殆んどしていない。然し、それでも俺はしばらくして、色んな隅ツこから何十という「共産党」や旗やK・Pを探がし出すことが出来た。俺の前にこの同じ室に入っていた同志はどんな人であつたらう。俺はそれらの落書の匂においでもかぐように、そこから何かの面影でも引き出そうとした。「書信室」へ行くと、そこは机でも壁でも一杯に思う存分の落書きがしてある。俺も手紙を書きに行つたときは、必ず何か落書きしてくることに決めていた。

成る程、俺は独房にいる。然し、決して「独り」ではないんだ。

せき、くさめ、屁

屁への音で隣りの独房にいる同志の健在なことを知る——三・一五の同志の歌で、シャバ

にいたとき、俺は何かの雑誌でそれを読んだことがあった。此処へ来て初めて分つたのだが、どの監房でも皆がよく屁をしていた。——然し俺の場合一日に四十から五十、いやそれ以上の屁が出るで弱ってしまった。これではかえって隣りにいる同志はキツト俺の健康を氣遣きづかっているかも知れない。

俺はどうしたのかと思った。診察のとき、屁のことを医者に云った。

「それは醜はづこ醜はづこし易い麦飯を食って、運動が不足だからですよ。」

と、このお抱え医者は事もなげに云って、それでも笑った。

そのことがあつてから、俺は屁の事について考えた。此処にいと、どんなに些細ささいなことに對しても、二日も三日もとツくりと考えられるのだ。そして、これからは次々と出る屁を、一々丁寧ていねいに力をこめて高々と放すことにした。それは彼奴等きやつらに對して、この上もないブツ弾になるのだ。殊にコンクリートの壁はそれを又一層高々と響きかえらした。しばらく経つてから氣付いたことだが、早くから来ているどの同志も、屁ばかりでなく、自分独特のくさめとせきをちアんと持つていて、それを使つてのことだった。音楽的なもの、示威的なもの、嘲笑的なもの……等々。

夜になつて、シーンと静まりかえつてるとき、何処かの独房から、このくさめとせき

が聞えてくる。その癖から、それが誰かすぐ分る。それを聞くと、この厚いコンクリートの壁を越えて、口で云えない感情のこみ上がってくるのを感じる。

俺だけは同志の挨拶をかわす方法を、この「せき」と「くさめ」と「屁」に持っているワケだ。だから、鼻の穴が微妙にムズ痒がゆくなって、今くさめが出るのだなと分ると、それを実に大切にするんだ。

——俺もしばらくして、せきとくさめに自分のスタイルを持つことに成功した。

オン、ア、ラ、ハ、シャ、ナウ

高い窓から入ってくる日脚の落ち場所が、見ていると順々に変わって行つて——秋がやってきた。運動から帰ってきて、扉の金具にさわってみると、鉄の冷たさがヒンヤリと指先きにくるようになった。

俺は初めての東京の秋の美しさを、来る日も来る日も赤い煉瓦と鉄棒の窓から見える高く澄みきった空に感じる事が出来た。——北の国ではモウ雪まじりのビシヨク／＼雨が降っている頃だ。——今までそうでもなかったのに、隣りの独房でさせているカタ、コトと

いう物音が、沁みるような深さで感ぜられる。隣りの同志は「全協」だろうか、P（無新）の人だろうか、Y（無産青年）だろうか、それとも黨員だろうか……？——秋深く隣は何をする人ぞ。

扉が突然ガチャン／＼と開いた。

「どっこいしょ！」

蒲団をかついできた雑役が、それをのしんと入口に投げ出した。汗をふきながら、

「こんな厚い、重たい蒲団って始めてだ。親ツてこんな不孝ものにも、矢張りこんなに厚い蒲団を送って寄こすものかなア。」

俺はだまっていた。

独りになつて、それを隅の方に積み重ねながら、本当にそれがゴワ／＼していて重く、厚くて、とてつもなく巾が広いことを知った。

その後、俺は外そとの人に「夜、蒲団があまり重くて寝苦しい時には、この重さが一体何んの重さであるか位は考えてみないわけでもない。」そんなセンチメンタルなことを書いたことがあった。

蒲団と一緒に、あわせ拾が入ってきた。

二三日して、寒くなったので着物をき換えたとき、袂に何か入っているらしいので、オヤと思って手探ぐりにすると、小さいカードのようなものが出てきた。

卯の歳

文珠菩薩

守本尊

金と朱で書いた「お守」だった。

マルキストにお守では、どうにもおさまりがつかない、俺は独りでテレてしまった。

中を開けてみると「文珠菩薩真言」として、朝鮮文字のような字体で、「オン、ア、ラ、

ハ、シヤ、ナウ」と書かれている。

「オン、ア、ラ、ハ……………」

俺は二三度その文句を口の中で繰り返している。

却々スラ／＼と云えない。然しそれを繰り返しているうちに、俺は久し振りで長い間会わないこの愚かな母親の心に、シミ／＼と触れることが出来た。

俺たちはどんなことがあるかと、泣いてはいけなそうだ。どんな女がいようと、惚れ
てはならないそうだ。月を見ても、もの想いにふけてはいけなそうだ。母親のことを

考えて、メソメソしてもならないそうだし——人はそう云う。だが、この母親は俺がこういう処に入っているとは知らずに、俺の好きな西瓜すいかを買っておいて、今日は帰ってくる、そしてその日帰って来ないと、明日は帰ってくると云って、たべたがる弟や妹にも手をつけさせないで、終しまいにはそれを腐らせてしまったそうだし。俺は此処へ来てから、そのことを、小さい妹の仮名交りの、でかい揃わない字の手紙で読んだ。俺はそれを読んでから、長い間声をたてずに泣いていた。

俺には、身体の小さい母親が、ちよこなんと坐って、帯の間に手をさしはさんでいる姿が目に見える。それが、何時でも心配事のあるときの、母の恰好だったからである。

プロレタリアの旗日

コツ、コツ、コツ……………。

隣りの独房から壁をたゞいてくる。

コツ、コツ、コツ……………。

こつちからも直ぐたゞきかえしてやる。

隣り同志の壁のたゞき方は色々に変った。それはみんな我々の歌の拍子になっていた。俺ときたら「インターナショナル」でさえ、あやふやにしか知っていないので困った。相手のたゞいて寄よす歌が分ると、そのしるしに、こつちからも同じ調子で打ちかえしてやる。隣りはその間、自分のをやめて聞いているのだ。そして俺のが終ると、

ドン、ドン、ドン……………。

と打つてよこす。——これで二人の同志の意志が完全に結ばれるんだ。

毎日々々が同じな、長い〜退屈な独房で、この仕草の繰り返えしは一日の行事のうちで、却々重要な場面をしめている。ある同志たちが長い間かゝって、この壁の打ち方から自分の名前を知らせあつたり、用事を知らせあつて連絡をとつたときいたことがあるので、俺も色々打ち方の調子をかえたり、間隔を置いたり、ちゞめたりしてやってみようとしたが、うまく行かなかつた。

俺だちはお互に起床のときと、就寝のときと、飛行機が来たときと、元気なときと、クシャンとしたときと、そして「われ〜の旗日」のときに壁を打ち合った。——ブルジョワ階級が色んな「旗日」を持つているのと同様に、もはや今では日本のプロレタリアートも自分自身の「旗日」を持つている！

ところが、どうしても残念なことが一つあった。それは隣りの同志が実によく「われ／＼の旗日」を知っていることである。……いや、そうでなかった。それなら俺だって却々負けずに知っている。実は、その日になると、俺は何時でも壁を打つことで、隣りの同志にイニシアチヴを取られてしまうのだ。今度こそ俺の方から先手を打ってやろう、と待っている、だが、その日になると、又もしてやられるんだ。——九月一日も、十月七日も、残念なことには「十一月七日」にもやられてしまった。

その日——十一月七日の朝「起床」のガラン／＼が鳴ったせつな、監房という監房に足踏みと壁たゝきが湧き上がった。独房の四つの壁はムキ出しのコンクリートなので、それが殷々^{いんいん}とこもつて響き渡った。——口笛が聞える。別な方からは、大胆な歌声が起る。俺は起き抜けに足踏みをし、壁をたゝいた。顔はホテリ、眼には涙が浮かんできた。そして知らないうちに肩を振り、眉をあげていた。

「ごはんの用——意ッ！」

俺はそれを待っていた。丁度その時は看守も雑役も、俺のいる監房（No. 19.）から一番離れた（No. 1.）のところにいるのだ。——俺はいきなり窓際にかける、窓枠に両手をかけて力をこめ、ウンと一ふんばりして尻上りをした。そして鉄棒と鉄棒の間に顔を押し

しつけ、外へ向つて叫んだ。

「ロシア革命万歳!!」

「日本共産党バンザア—イ!!」

ワア—ツ! という声が何処かの——確かに向う側の監房の開いた窓から、あがった。向うでも何かを云っている。俺の胸は早鐘を打った。

飯の車が俺の監房に廻わつてきたとき、今度は向うの一番遠い監房——No.1あたりで「ロシア革命万歳!!」を叫んでいるのが聞えた。看守はむずかしい顔をしていた。——誰か口笛で「インターナショナル」を吹いている……。俺は飯をそのままにして置いて——興奮し、しばらくつつ立つていた。

丁度、飯を食い終る頃だった。デッキになつている階上の廊下をバタ／＼と誰か二、三人走つて行く音がした。何処かの監房が荒々しく開けられた。そして誰か引きずり出されたりしい。突然、もつれ合つた叫声が起つた。身体と身体が床の上をずる音がして、締め込みでもされているらしいつまつた鈍い声が聞えた。——瞬間、今迄喧しかつた監房という監房が抑えられたようにシーンとなつた。俺は途中まで箸はしを持ちあげたまゝ、息をのんでいた。

と、——その時、誰か一人が突然壁をたゝいた。それがキツかけに、今度は爆発するよ
うに、皆が足踏みをし、壁をたゝき出した。

われ／＼の十一月七日を勇敢に闘った同志は、そのなかを大声で何か叫びながら、連れ
て行かれた。俺だちはその声が遠くなり、聞えなくなる迄、足踏みをやめなかつた。

出廷

寒い冬の朝、看守が覗きのぞから眼だけを出して、

「今日はお出廷だぜ。」

と云つた。

飯を食つてから、俺は監房を出て、看守の控室に連れて行かれた。皆は火鉢ひばちの縁に両足
をかけて、あたつていた。「火」を見たのは、それが始めてだった。俺はその隅の方で身
体検査をされた。

「これは何んだ？」

袂を調べていた看守が、急に職業柄らしい顔をして、何か取り出した。俺は思わずギョ

ツとした。——だが、それはお守だった。

「あ、お守だよ。」

俺はホツとして云った。

看守はあやふやな、分らない顔をして、

「へ——？ お守？……どうしたんだ？」

と独り言のように云った。

「おふくろがね……。」

俺がそう云いかけると、その年寄った看守はみんな云わせず、

「あゝ、そうか、そうか、——そうだろう！ 勿もつたい体ないことだ！」

と云って、それを額へもって行つて頂いた。それから元通りにして、丁寧に袂にもどした。

「さ、両方手を出したり。」

看守が手錠の音をガチャ／＼させて、戻ってきた。そして揃えて出した俺の両手首にそれをはめた。鉄の冷たさが、吃びっくり驚させる程ヒヤリときた。

「冷てえ！」

俺は思わず手をひっこめた。

「冷てえ？——そうか、そうか。じゃ、シャツの袖口をのぼしたり。その上からにしよう。

—

「有難^{ありがた}てえ。頼む！」

「こんな恰好見たら、親がなんて云うかな。不孝もんだ！」

年を取って指先が顫えるらしく、それにかじかんでいるので、うまく鍵穴に鍵が入らずガチャガチャとそのまわりをつついた。向い合いながら、俺はその前こぐみになっている看守の肩を見ていた。

その日の出廷はもう一人いた。小柄な瘠せた男で、寒そうに薄い唇の色をかえていた。

「第二無新」の同志らしかった。

俺は半年振りで見える「外」が楽しみでならなかった。護送自動車が刑務所の構内を出てから、編笠を脱ぎ、窓のカーテンを開けてもらった。——年の暮れが近く、街は騒々しく色々な飾をしていた。処々^{ところどころ}では、楽隊がブカ／＼鳴っていた。

N町から中野へ出ると、あののろい西武電車が何時のまにか複線になって、一旦雨が降

ると、こねくり返える道がすっかりアスファルトに変わっていた。随分長い間あそこに坐っていたのだという事が、こと新しい感じになって帰ってきた。

新宿は特に帰りに廻わつてもらふことにして、自動車は淀橋から右に入つて、代々木に出て、神宮の外苑を走つた。二人は窓硝子に頬も、額も、鼻もぺしやんに押しつけて、外ばかりを見ていた。青バスの後に映画のビラが貼られているのを見ると、一緒の同志が「出たら、第一番に活動を見たいな。」と云つた。

時代錯誤な議事堂の建物も、大方出来ていた。俺たちはその尖塔せんとうを窓から覗きあげた。頂きの近いところに、少し残っている足場が青い澄んだ冬の空に、輪郭りんかくをハッキリ見せていた。

「君、あれが君たちの懐なつかしの警視庁だぜ。」

と看守がニヤ／＼笑つて、左側の窓の方を少しあげてくれた。俺ともう一人の同志は一寸顔を見合せた。——警視庁と云えば、俺は前に面白い小説を読んだことがあつた。

警視庁の建築工事に働きに行つてゐる労働者の話なんだが、その労働者がこの工事をウソと丈夫に作つておこうと云つたそうだ。ところが仲間に、よせやい、自分の首を絞めるものではないか、いゝ加減にやツつけて置けよとひやかされてしまった。すると、その労

働者が、

「馬鹿云え。政権一度ひとわれらの手に入らば、あすこはゲー・ペー・ウの本部になるんだ。そのために今から精々立派な、ちつとやそつとで壊れない丈夫なものにして置くんだ！」と云った。そういう筋のものだった。

小説嫌いの俺も、その言葉が面白かったので、記憶に残っていた。

その警視庁の高い足場の上で、腰に縄束をさげた労働者が働いていた……。それが小さく動いているのが見えた。

その日、予審廷の調べを終つて、又自動車に乗せられると、今度は何んとも云えないイヤな気持ちがあった。来るときは、それでもウキウキしていたのだ。

新宿は矢張り雑踏していた。美しい女が自動車の前で周章てるのを見ると、俺たちは喜んだ。——だが、何故こんなに沢山の「女」が歩いているのだろう。そして俺が世の中にいたとき、決してこんなに女が沢山歩いていなかった。これは不思議なことだと思つた。

女、女、女……俺たちの眼は、痛くなるほど雑踏の中から、女ばかりを探がし出していた……。

刑務所との距離が縮まって行く。俺たちは途中色んな冗談を言い合ったものだ。然し二人ともだん／＼黙り込んできた。

「街を見たし……又、坐ってるさ……。」

俺はそれだけをポツンと云った。そして、それっ切り黙ってしまった。

今はモウ自動車は省線のガードをくゞって、N町へ入っていた。

今年も、あと五日しかない。

独房小唄

「……私この前ドストイエフスキーの『死の家の記録』を読んだから、そんな所で長い／＼暗い獄舎の生活をしている兄さんが色々な想像され、眠ることも出来ず、本当に読まなければよかつたと思っています。」

「でも、面会に行く度に、兄さんはとてもフザケたり、監獄らしくない大声を出して笑ったり、どの手紙を見ても呑気なことばかり書いてるので、——一体どういうワケなのか、私には分かりません。」

俺はこの手紙を見ると、思わず吹き出してしまった。ドストイエフスキーとプロレタリアの闘士をならべる奴もあるもんでない、と思った。俺も昔その本を退屈しいしい読んだ記憶がある。成る程、人道主義者には此処はあんなにも悲痛で、陰惨で、救いのないものに見えるかも知れないが未来を決して見失うことのないプロレタリアートは何処にいようが「朗か」である。のん気に鼻唄さえうたっている。

時々廊下で他の「編笠」と会うことがある。然したった一目で、それが我々の仲間か、それともコソ泥か強盗か直ぐ見分けがついた。——編笠を頭の後にハネ上げ、肩を振って、おおまた大股まなまに歩いている、それは同志だった。暗い目差しをし、前こぐみに始終オドくくして歩いている他の犯罪者とハッキリちがっていた。

それどころか、雑役が話してきかせたのだが、俺たちの仲間のあるものは、通信室や運動場の一定の場所をしめし合せ、雑役を使って他の独房の同志と「レポ」を交換したり「獄内中央委員会」というものさえ作っている、そして例えば、外部の「モツプル」と連絡をとって、実際の運動と結びつこうとしたり、内では全部が結束して「獄内待遇改善」の要求を提出しようとしているようだ。

彼奴等がわれくをひつつかんで、何処へ押しこもうとも、われくは自分たちの活動

を瞬時の間だつて止めようとはしていないのだ。——「独房」「独房」と云えば、それは何んだが地獄のような処でゞもあるかのように響くかも知れない。そのために、そこに打ち込まれることを恐れて、若しも運動が躊躇ちゆうちよされると考えるものがあるとしたら、俺は神に（神に、と云うのはおかしいが）かけて誓おう——

「全く、のん気なところですよ。」と。

第一、俺は見覚えの盆踊りの身振りをしながら、時々独房の中で歌い出したものだ——

独房どくぼうよいとオこ、

誰で——もオおいで、

ドッコイシヨ

.....

附記 田口の話はまだく沢山ある。これはそのホンの一部だ。私は又別な機会に次々とそれを紹介して行きたいと思っている。

(一九三一・六・九)

青空文庫情報

底本：「工場細胞」新日本文庫、新日本出版社

1978（昭和53）年2月25日初版

初出：「中央公論 夏期特集号」中央公論社

1931（昭和6）年7月

入力：細見祐司

校正：林 幸雄

2006年12月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

独房

小林多喜二

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>